



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1155

04.05.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート2

第1章

誰が本当に戦争を始めたのか？

「ヨーロッパで戦争の松明を振りかざす者は、混乱以外何も望むことはできない。」

アドルフ・ヒトラー、1939年8
月3日

従来の歴史家たちは、ヒトラーを第二次世界大戦の単独責任者としているが、それはアドルフ・ヒトラーが個人的にもイデオロギー的にもまったくふさわしくない役割だった。第一次世界大戦中、一般兵士だった彼は、親しい仲間の激しい死を目の当たりにし、自分自身も耐え難いマスタード

ガス攻撃の犠牲となり、視力を失いかけた。前線での4年間、彼は塹壕戦の言語に絶する恐怖に直面した。

休戦後、彼は民族社会主義を発展させ、その中心的な信条はアーリア人の保存である。ヒトラーは、すべての白人はそれぞれの国籍に関係なく、同じ民族の兄弟姉妹であると説いた。従って、アーリア人同士の戦争は兄弟間の争いであり、避けなければならない。戦争では、国のために最も惜しみなく命を捧げる兵士が最高の個人であり、それによって最も貴重な構成員を失うことによって社会が貧しくなると彼は嘆いた。ドイツ首相に選出された後、ヒトラーが最も情熱を注いだのは再軍事化ではなく、自国の社会改革だった。特に文化改革に心を奪われ、余生をドイツの都市改革に費やすことを望んだ。戦争が始まっても、彼はそれを自分の真の関心からの逸脱とみなし、公共事業の実現にもっと幸福に打ち込めなかったことをしばしば悔やんだ。紛争中も何度か説明しているように、「私は熱心な建設者だが、消極的な将軍である。

しかし、ヒトラーは国際情勢、特にソ連の脅威に直結する国際情勢に強い関心を抱いていた。第三帝国とファシスト・イタリアは、ともに中心的な「枢軸」として機能し、その周りに他の大陸諸国民が結集し、ヨーロッパの中軸を強化することができるだろう。大日本帝国はアジアにおける共産主義の蔓延を封じ込め、イギリスとの同盟は世界最大の海軍力と最強の軍隊であるドイツ国防軍を結びつけた。こうしてソ連の巨像を封じ込めれば、戦争をしなくてもソ連は崩壊するだろう。こうして彼は望んだ。

しかし、もはや敵対行為を避けることができなくなったとき、ヒトラーは出陣した。20年以上前の西部戦線での実地体験は、正規の軍事教育にはないものを彼に教えた。さらに、彼の戦後の政治運動は、大衆行動を繰り返し強調しながら、それ自体が戦闘運動のように行われた。しかし、アドルフ・ヒトラーの天賦の才能が、20世紀最大の、おそらくは史上最大の軍閥としての指導力において最も重要な要素であったことは否定できない。この歴史に引用されている彼の優れた能力の数多くの例は、ヒトラーが第二次世界大戦の最高の戦略家であり指導者であったことを裏付けている。その代表的なものが、彼自身が立案したベルギーのエベン・エマール要塞攻略作戦であり、これなくして西部作戦全体は不可能であっただろう。枢軸国側、連合国側を問わず、このような軍事的功績は他に例を見ない。

これは、ヒトラーが決してミスを犯さなかったという意味ではない。ヒトラーは1940年春、フランス侵攻に成功する直前、自分自身についてこう

語っている。彼は間違っている。私が認識している限りでは、少なくともその2倍の間違いを犯している！しかし、もしチャーチル氏とその追隨者たちが犯した過ちが1つだけだとしたら、それは私が犯したどの過ちよりもはるかにひどいものだ。

ヒトラーの最も重大な過ちは、遅ればせながら本人も認めているように、ドイツ参謀本部を信頼してしまったことだ。彼は有言実行の男であったから、他の誰か、特にドイツ軍将校が不誠実な行動をとるとは想像できなかったのだ。しかし、1945年の最終的な敗戦の責任は、主にドイツ軍将兵の一部にあった。西側連合国の同胞とは異なり、ヒトラーは銀のスプーンを口にくわえて生まれたわけではない。富、社会的地位、政治的地位、そして個人的な権力や名声---F.D.R.やチャーチルが夢中になったものの---は、彼を拒んだ。ルーズベルトがハイドパークでニューヨークの金融エリートたちと歓談している間、貧困にあえいでいたヒトラーはウィーンで自分の水彩画をわずかな小銭で売っていた。その後、ヒトラーが西部戦線で名もなき兵士として命をかけていたとき、チャーチルはロンドンの安全な内務省から、ガリポリの浜辺で無意味に虐殺される何千人ものオーストラリア人を送り込んだ。

ヒトラーは、世界が知る限り最悪の専制政治と長い間結びつけられてきたため、彼の支配に関する真実を知れば、誰もが必ず驚かされる。ヒトラーを同時代の文脈でとらえると、多くのことが明らかになる。第一次世界大戦が終わるまで、ドイツは時代遅れの王政に支配されていた。第一次世界大戦が終わると、ドイツはソビエト連邦の足台としか考えない自称マルクス主義者、民族よりも自分たちの富を守ろうとする資本主義保守派、20年代の「愉快的退廃」に浸るキャバレー・デモクラートの間で引き裂かれた。要するに、ドイツには善政の伝統がなかったのだ。

ヒトラーが首相に就任したとき、彼には良識ある政権を樹立するための前例がなかった。彼に突きつけられた唯一の選択肢は、権威主義的支配か社会解体だった。彼が歴史上最も強大な人物の一人であったことは事実だが、それは彼が持っていた政府権力や自由に使える武力によるものではなく、国民の圧倒的な献身によるものであった。国民からこれほど愛された人物は他にいない。国民の同意なしに統治したわけでもない。彼らは結局のところ、自分たちの法定代理人として彼を権力の座に選んだのだ。その後、平時の主要な決定については、常に国民投票によって国民に賛否を問うた。国際的な監視委員会（ドイツに敵対的な国もある）によってその

完全性が監視され、これらの国民投票は一貫して、有権者の90%以上が国家社会主義政権を承認し、ほとんどの場合、そのパーセンテージの上位を占めた。例えば、1938年12月4日のステューテンラント選挙では、294万票のうち264万票（98.8%）がNSDAPに投じられた。同年初め、ヒトラーがオーストリア国民に第三帝国の一部になりたいかどうか尋ねたところ、99.7%が肯定的な回答をした。

後にも先にも、これほどの支持率を獲得した民主政治家はいない。当然のことながら、この極めて人気の高い人物に対する彼らの根深い憎悪は、個人的な嫉妬に根ざしていた。ルーズベルト、チャーチル、クリントン、ブッシュ、その他すべてのユダヤ人のフロントマンは、アドルフ・ヒトラーが同胞市民から受けた支持の何分の一も達成できなかった。民主主義が「民衆の支配」であるならば、彼は真の意味での「民主主義者」であった。彼自身が問いかけたように、「他の国のどこに同じような『民主主義』があるだろうか？人民と指導者、国家と政府がこれほど完全に融合し、互いの近くに立っている国が他にあるだろうか？」それでも、総統が“テーブルトーク”で明らかにしたように、彼は第三帝国のポピュリスト国家を、彼が大いに称賛した移民法や帰化法を持つ合衆国憲法に倣った、構想中の人種権威主義共和国への架け橋とみなしていた。悲劇的なことに、その自由のビジョンは、政治的自由よりも大量破壊を好む外国人によって消滅した。

枢軸側指導者と連合側指導者の違いを説明するのに、戦時中に交わされた贈り物の比較ほどふさわしいものはないだろう。1942年、ムッソリーニは59歳の誕生日に、ヒトラーから19世紀の偉大な哲学者フリードリヒ・ニーチェの美しい装丁の著作全集を受け取った。同じ年の誕生日には、フランクリン・ルーズベルトがウィンストン・チャーチルにバーボンのケースを贈った。

自国が第三帝国に宣戦布告するわずか6年前、『ロンドン・タイムズ』紙の記者からアドルフ・ヒトラーをどう思うかと尋ねられたチャーチルは、もしイギリスがドイツを圧倒したような大災害に見舞われたら、総統のような天才的な人物がイギリス国民を救いに導いてくれるよう神に祈ると答えた。さらに驚くべきことに、その前の10年間、チャーチルはロンドンの権威ある『イラストレイテッド・サンデー・ヘラルド』紙に長文の記事を寄稿している（1920年2月8日）。その中で彼は、共産主義をユダヤ人

テロリストが率いる殺人暴政であり、その革命はどの国であれ無慈悲に消滅させなければならないと述べている。

同じ10年、彼はこう宣言した。「ロシアを再征服するのは文明世界の義務である。ソビエトはロシアの代表ではない。彼らは、われわれが文明と呼ぶものとはまったく異質で、敵対的ですからある国際的概念を代表している。ロシアに軍事的、道徳的に勝利することは、第一次世界大戦の勝者だけではあまりにも重い任務である。ドイツは誰よりもロシアを知っている。ドイツはロシアを誰よりもよく知っている。ドイツなしではヨーロッパは何もできない。しかし、ヒトラーが「絶好の機会」とばかりにロシアを攻撃すると、チャーチルはヒトラーを「侵略者」と非難し、ヒトラーが軽蔑していると主張するソビエトに軍事援助を行った。

こうした不可解な矛盾にもかかわらず、従来の歴史家は、第二次世界大戦の20年も前に発表された反共産主義、さらには反ユダヤ主義的な発言を無視し、アドルフ・ヒトラーやドイツの指導者すべてに妥協することなく反対したチャーチルを、20世紀で最も輝かしい英雄の一人として祀り続けている。チャーチルの裏表のない性格は、おそらく彼が生涯患っていたアルコール依存症との関連で理解されるかもしれない。彼の最も印象的な口癖のひとつは、ある女性国会議員に答えたもので、その女性議員は、彼がしばしば酩酊した状態で現れることによって、その高貴な組織の信用を失墜させていると痛烈に訴えた。彼は、彼女が提起した問題を巧みに横取りし、「明日はしらふにします。しかし、マダム、あなたはまだ醜いままでしょう！」と言い放った。

もし私があなたの妻なら、あなたのウイスキーに毒を入れるでしょう。「私があなたの夫だったら、それを飲むわ！」。

親友のフランクリン・ルーズベルトでさえ、彼を「あの酔っぱらいのクズ」と酷評した。1940年夏、英国首相を訪問したサムナー・ウェルズは、彼が支離滅裂でアルコールに溺れた状態にあるのを発見したと伝えられている。彼の情緒不安定の一因は、チャーチルの政治的に問題のある家系にあったのかもしれない。彼の母親はジェニー・ジェロームというアメリカ人のユダヤ人女性だった。フランクリン・ルーズベルトがユダヤ人であったことを連合国の最高指導者に加味すると、その人種的アイデンティティとヒトラーへの憎悪の原点が明らかになる。

確かに、チャーチルの個人的な行動はしばしば奇矯の限度を超えており、女性の下着を身につけたり、裸の露出を好むなど、本当の狂気にも近

いものであった。例えば、1942年にワシントンD.C.を訪問した際、彼は驚いたF.D.R.に全裸で立ち向かった。その後、訓練中に頭上を低空飛行する英国爆撃機の姿に感極まった首相は、服をすべて脱ぎ捨て、全裸でタマラックの上を叫びながら走り、集まった空軍将校や航空機会社の重役たちを驚かせたこともあった。もちろん、このような残念な事件は、1945年以降ずっと、国家安全保障と士気を理由に公にされなかった。

しかし、チャーチルの原動力となったのは、戦争とそれがもたらす人間破壊に対する病的なまでの情熱だった。カサブランカ会議の席上、彼はルーズベルトに、進歩は戦争の時にしか成し得ない、平和には自己満足しかない、とつぶやいた。ゲッペルス博士は、チャーチルを紀元前356年にエフェソスの美しいディアナ神殿を燃やしたギリシア人と同じ20世紀の人物と見なしていた。彼はヨーロッパのヘロストラトウスとして歴史に名を残すに違いない。何世紀にもわたって多くの世代が築き上げてきたものを破壊することによってのみ、その名を永続させることができるのだ」(1945年3月17日)。

倫理的行動の擁護者という理想的なイメージとはかけ離れたチャーチルの全キャリアは、策略と不道德な操作の上に成り立っていた。例えば、1941年6月、チャーチルは北米における英国諜報部のトップであるウィリアム・スティーブンソン卿に、ヒトラーの助けを借りてラパス政府を転覆させ、南米にナチスの傀儡国家を樹立する計画のリーダーとして、ベルリンのボリビア駐在武官エリアス・ベルモンテ少佐が作成したとされる書簡を米國務省に届けさせた。この手紙はステファンソンによって完全に捏造されたものだったが、アメリカの報道機関とルーズベルト政権が本物であるとして無批判に受け入れたことで、無実のボリビア人少佐は不名誉除隊となり、彼の欺瞞に満ちた同胞はドイツに宣戦布告することになった。

ボリビアのドイツ人はその後4年間、南米の刑務所では悪名高い条件の下で抑留された。一方、チャーチルの欺瞞の真の狙いは、第三帝国に対するアメリカの世論を扇動するための口実を、またしてもF.D.R.に与えることだった。このプロパガンダの成功を受けて、ステファンソンはヒトラーの南米占領計画を詳細に記した「ナチスの秘密地図」を偽造した。この謀略的な文書の暴露は、アメリカ大統領によって丸呑みにされた。

その10年前の1930年代初頭、ウィンストンの政治キャリアは低迷していた。やり手の息子ランドルフがギャンブルで負った借金が破産を招き、愛

着のある田舎の領地チャートウェルも失いかけていた。絶望の淵に立たされた彼は、大恐慌時代に安泰な官職を失った12人の元政治家からなる秘密結社「フォーカス」に参加した。こうした失業中の「政治家」たちは、権力を取り戻すためなら何でも言うし、何でもするとわかっていたので、ユダヤ人たちは「フォーカス」から、ドイツ破壊計画の隠れ蓑となる異邦人の偽者を何人か探し出した。彼らの最大の獲物はウィンストン・チャーチルだった。

1936年以来、「フォーカス」の住人たちは、アメリカ・ユダヤ人会議、ロンドン英国ユダヤ人代議員会、そして英国シェル会長のバーナード・W・コーエン卿から豊富な資金を得ていた。彼らはチャーチルに5万ポンドを支払い、ヒトラーを煽動させた。チャーチルは反ナチスのための売春婦という評判が高まった。6年後、彼はフランクリン・ルーズベルトに「シオニスト政策に忠誠を誓っている」と語った。

1938年、ウィンストンはナイトの称号を持つユダヤ人富豪ヘンリー・スターコス卿から80万ドルを受け取った。彼の任務は、国際的に管理された国民投票にもかかわらず、オーストリア人の大多数がドイツへの加盟に票を投じたオーストリアと帝国の同盟を非難することだった。同年、プラハ政府は親共産主義者の外相ヤン・マサリクをロンドンに派遣し、「フォーカス」のための200万ポンドと、チェコ人が総統に甘すぎるとみなしたネヴィル・チェンバレンを打倒するようメンバーに命じた。ドイツ側はチャーチルが外国からの資金を受け入れていることを知り、ミュンヘン協定の直前にチェンバレンに知らせた。しかし、チャーチルはユダヤの思惑のために雇われた口利き役として、新たな有利なキャリアを築くことになった。

いわゆる「ロンドン電撃作戦」の間、チャーチルは連合国側の報道陣から、イギリス国民に寄り添い、その危険と苦難を分かち合い、自らの反骨の勇気を模範とするよう勇気づけたと称賛された。実際、英国諜報部はドイツ軍の空襲を事前に把握しており、その情報をチャーチルに密かに伝えていた。この秘密の脱出ルートで電撃作戦を回避できた者は他に誰もいなかった。オールクリア」が鳴り響いた後、彼はこっそりとロンドンに戻り、ニュースリールのカメラの前で、葉巻で汚れた太った2本の指で勝利を意味するVの字を描きながら闊歩し、「We can take it!」と反抗的につぶやいた。

1940年11月14日の午後、チャーチルはドイツ空軍の再来を避けるためにロンドンを出発したが、暗号解読者たちからの極秘報告で、爆撃機の次の標的はコベントリーになると知らされた。首都の安全な場所に戻ったチャーチルは、本社ビルの屋上で反抗的な姿勢をとり、記者やカメラマンのために、拳を握って空にいる実在しないナチスに挑んだ。ドイツ空軍が遠く離れたコベントリーを爆撃する中、首相の不屈の勇気の映像は世界中に公開された。

英国の民間人の苦しみに関わる彼の忌まわしい無慈悲さを示す一例として、1941年5月10日の夜、チャーチルは、ロンドンへの特に激しい空襲がこの上ない騒乱を引き起こしているとの知らせを受けた。彼自身の言葉を借りれば、「どうすることもできなかったので、私は個室の試写室に入り、マルクス兄弟の映画を見て楽しんだ」。地下の地下鉄駅に身を寄せて命拾いをしているロンドン市民は、チャーチルのことをどう思っただろうか。その一方で、彼が安全な田舎の豪華な隠れ家で、ユダヤ系アメリカ人の映画を見てほくそ笑んでいたと知ったら。

1944年7月、敗戦まで1年を切った弱体化した帝国を前に、チャーチルはドイツ民間人への炭疽菌攻撃を命じた。恐怖におののいた将軍たちは、ヒトラーは必ず報復し、毒ガス弾頭で武装したV-1爆撃機をロンドンに送り込むだろうと念を押すことで、大量殺戮を思いとどまらせた。アリア人大量虐殺の計画を断念するようヒトラーを説得するのに1ヵ月もかかった。後に彼は、「私の将軍たちの中にいる牧師たちが、私が実行するのを妨げたのだ」と恨み節を述べた。もし彼の炭疽菌攻撃が実行されていたら、ヨーロッパ大陸のすべての生物は、連合国および中立国の住民を含めて、事実上絶滅していただろう。

流血を好んだチャーチルは、肉体的な臆病者であっただけでなく、極めて稚拙な軍国主義者でもあった。第一次世界大戦中、彼は提督の長として、何千人ものオーストラリア歩兵をトルコ侵攻に駆り出した。ガリポリの大失敗は、単なる敗北ではなく、他の指揮官であれば終身刑を宣告されるような、たかがトルコ人の手による連合国側の屈辱であった。しかし、チャーチルは軍事指導者であるというよりも狡猾な政治家であり、25年後、彼は再び政権に返り咲いた。彼は、英米両国の助言者の忠告に反して、連合軍の戦略を「ヨーロッパの柔らかい下腹部」だと主張するものにそらすことで、はるかに壮大な死のスケールで失態を繰り返した。

何万人もの連合軍兵士が、いたずらに戦争を長引かせ、戦略的成功をもたらすこともなかったイタリア作戦で倒れた。1943年当時、チャーチルが「オーストリアへの迅速な突破を達成する」と確約していたおかげで、ドイツが降伏したとき、英米軍は2年近くにわたる苦難と虐殺の末、イタリアでまだ泥沼にはまり込んでいた。戦争を通じてチャーチルと密接に働いた英国海軍作戦部長ラルフ・エドワーズは、チャーチルを「間違いなく歴史上最悪の戦略家の一人」と評した（アーヴィング『チャーチルの戦争』第2巻、103）。

チャーチルの、今世紀最大の英語演説家という人為的に保たれた名声は、彼の不朽の詐欺的イメージの一部にすぎない。彼の感動的なラジオ放送は、英国人に、彼が長い間準備してきた戦争で戦い、耐え、死ぬよう促した。この刺激的な放送のおかげで、イギリス国民は6年間という最悪の状況下で耐え抜き、50万人が命を落とした。その間、彼はヒトラーが英国に提示した寛大にもほどがある和平提案を注意深く隠していた。また、英国の男女が英雄的首相のものだと信じ込まされた有名な声の正体も隠されていた。チャーチルが酔っ払っていたり、二日酔いで人前で話すことができないときに、そのモノマネをするために選ばれたラジオ俳優だった。

1943年5月20日にルーズベルトに提案したように、ウィンストンは「世界の独裁者」を創設し、同盟国フランスから軍隊を永久に奪い、戦争で生き残ったわずかなドイツ人を永久に奴隷の地位に追いやるという野望を抱いていた。世界の権力は大英帝国、アメリカ、ソ連に限定されることになった。ルーズベルトはこれに同意したが、「モデレーター」という称号の方が政治的に受け入れられやすいという点だけは異なっていた。

チャーチルは熟れすぎた老年期を過ごし、豪華な饗宴で肥満し、検閲された自分勝手な歴史を書き記し、忘れ去られたような素人じみた絵を何十枚も描いた。1965年についに死が訪れると、彼は派手な葬儀の指示を残した。その指示には、誇大妄想のひねりが加えられていたが、特大の棺が通り過ぎる際には、テムズ川のほとりのクレーンをすべて降ろすよう指定されていた。シェイクスピアの『テンペスト』のように、その瞬間、全英国国民はこう叫んだかもしれない。“この酔っぱらいを神とし、この鈍い愚か者を崇拝するとは、私はなんという三重苦の大馬鹿者だったのだろうか！”。

チャーチルのように、F.D.R.はパブリック・リレーションズの達人だった。彼は「同じアメリカ人」として有権者に気に入られる方法を心得てお

り、彼が定期的にラジオで放送していた、いわゆる「炉辺談話」は、彼の謙虚で家庭的な「アップルパイ」のような人柄を強調するために慎重に計画されたものだった。ヒトラーと国家社会主義がF.D.R.に関心を抱いたのは、1937年になってからである。その年は選挙の年であり、この口達者な政治家は、一期限りの大統領として公職に就くことを恐れていた。その4年前、F.D.R.は大恐慌を終わらせると大見得を切ってホワイトハウスに入った。しかし、汚職にまみれた彼の民主的プログラムは何の役にも立たず、国民の失業率は依然として上昇の一途をたどっていた。総統閣下がルーズベルトについて言ったように、“もし彼の経済政策が平時にいつまでも続いていたら、彼の弁証法的な巧妙さにもかかわらず、遅かれ早かれこの大統領を失脚させていたに違いない”。

明らかに、F.D.R.のキャリアは国家の経済的健全性に依存していた。彼はついに、国を立ち直らせる唯一の方法は生産を急発進させることであり、最も手っ取り早い方法は大規模な兵器製造であることに気づいた。しかし、アメリカの工場を兵器工場に変えることを正当化するには、重大な脅威、あるいは少なくともそのような錯覚が必要だった。最近の敵国として、ドイツは適切な厄介者となった。アメリカのマスコミや映画業界を支配していたユダヤ人たちは、ルーズベルトの最も熱心な宣伝マンとして大喜びした。ルーズベルトの憂慮に満ちたレトリックと相まって、反ナチス・ハリウッド映画が大量に製作され、ヒトラーに対する新聞による執拗な煽動が、やがて侵略が差し迫っているかのような国民的ヒステリーを引き起こした。このような人為的な恐怖の風潮の中で、大統領は、有権者の不安におびえる議会を通して、肥大化した軍事費のレールを敷くことができた。また、ナチス・ドイツ（テキサス州より小さい）が米国にもたらす致命的な脅威を騒ぎ立てることで、大統領は、解決できないまま長引いて悪化する恐慌から目をそらすことに成功した。

ルーズベルトのパニックに触発された武器製造は国家生産を刺激し始めたが、武器は生鮮品であり、使わなければ錆びつき、技術の進歩によって時代遅れになる。そのためにルーズベルトは戦争を必要とした。ルーズベルトは、ヨーロッパで暗躍する工作員ウィリアム・C・ブリットを通じて、ワルシャワの政治家たちが第三帝国との軍事衝突を引き起こせば、連合国の武力介入を期待できるという密約を交わした。こうしてポーランド人は、安上がり勝ち取った勝利のご馳走にありつくことができると騙され、（以下に述べるように）敵対行為を引き起こしたが、これが最悪の形

で裏目に出た。しかし、ヨーロッパで戦争が始まると、ルーズベルトの参戦計画は、国民世論調査によって深刻な後退を余儀なくされた。完璧な政治家であったルーズベルトは、1941年の大統領選挙では、大衆に支持される「平和綱領」を掲げて精力的に選挙運動を展開した。

その一方で、ヒトラーを挑発し、対米宣戦布告をさせるために、イギリス海軍に軍艦を供与したり、アメリカ海軍の駆逐艦が護衛するアメリカ貨物船でイギリスに物資を送ったり、さらにはイギリスの軍事作戦を直接支援するなどの工作を続けた。その最も顕著な例は、ビスマルクの位置を米海軍のPBV水上戦闘機が無線で英国に知らせたことで、英国は多大な犠牲者を出してビスマルクを撃沈することができた。ルーズベルトは、自国をヨーロッパ紛争から締め出す決意を固めた有権者に説得されて当選した同じ月に、海軍に「枢軸国の軍艦が見つければいつでもどこでも砲撃せよ」と指示した。これは、アメリカの中立に対する他のあらゆる違反をはるかに超えて、宣戦布告を構成するものだった。それでもヒトラーは頑なにこの餌に食いつこうとしなかった。

1941年8月9日、大西洋憲章会議の席上、ルーズベルトはチャーチルに、同胞の大半の意思に反してアメリカを戦争に引きずり込む「偶発事件のために働く」と内密に約束した。その後、ウィンストンは国王ジョージ6世に、大統領の戦略は宣戦布告ではなく、事件を起こすことで戦争を誘発することだと報告した。その前の10月30日、F.D.R.は国営ラジオで真剣にこう言っていた。前にも言ったが、何度でも言う：あなた方の息子たちは、外国の戦争に駆り出されることはない！」。今日でも、少なくとも何人かのアメリカの学者は、ゴア・ヴィダルと同様に、「ルーズベルトはヒトラーとの戦争に参加させるために嘘をついた。

恫喝に基づく経済が、もし米国がすぐに戦闘に参加できなければ、さらに深刻な経済崩壊の引き金になるのではないかと苛立ち、不安に駆られた大統領は、歴史家ハリー・エルマー・バーンズが「戦争への裏口」と呼ぶドアをノックした。それはドイツの反コミンテルンのパートナーに開かれた。同じ大西洋憲章会議の中で、チャーチルとルーズベルトは、1941年8月以降、当時まだ中立国であった日本を攻撃したいという共通の願望を口にした。彼らの計画は、コーデル・ハルや大統領を取り囲む他の政治的イエスマンたちによって称賛されたが、彼の軍事顧問たちは、アメリカは晩秋まで軍事的に敵対行為の危険を冒すことはできないと断言した。

それ以前の1941年7月26日、F.D.R.はすでに、日本が中国を侵略したことに対する国際石油禁輸措置をとっていた。なぜなら日本の産業はすべて外国から輸入される石油に依存していたからである。太平洋の兩岸の専門家は、日本社会は翌年の春までに貧困と飢餓に崩壊するだろうと計算していた。ルーズベルトは、この禁輸措置が日本の先制攻撃を煽り、それによって第二次世界大戦への参戦に対する民衆の支持を集めることを期待していた。

残念なことに、日本の内閣は反抗ではなく融和で対応した。東郷茂徳外相は「五箇条の御誓文」をワシントンに送り、アメリカ側が特に言及した中国地域の放棄や、人口過剰を緩和するための日本の海外進出の自制など、重要な譲歩を提示した。ルーズベルトはさらに、日米関係正常化のための内閣の「計画」を協議するための交渉再開を求めた。しかし、ルーズベルトの頭にあったのは平和ではなかった。彼は、アメリカ国民の承認の有無にかかわらず、できるだけ早く敵対行為を開始することを決めた。彼はすでに、11月中旬までに中国東部のクレア・シェノーの基地から、日本に対するアメリカの空襲を開始することを決めていた。実は、大統領は石油禁輸を発動する3日前に奇襲攻撃を許可していた。長い間アメリカの参戦を切望していたチャーチルは、アメリカのコーデル・ハル国務長官から、極秘の外交暗号を通じてこの吉報を知らされた。

1941年の日本軍空襲から60周年を迎えた『ロサンゼルス・タイムズ』紙に、「日本は真珠湾攻撃前に米国の掟を破っていたことが調査で判明」という見出しの記事が掲載された。スタッフ・ライターのヴァレリー・ライトマンは、神戸大学の若い日系アメリカ人歴史学教授が、1996年に米中央情報局（CIA）によって機密解除されたルーズベルト時代の文書記録を発見したと報じた。メリーランド州カレッジパークにある米国国立公文書館で、蓑原俊博氏が戦前の秘密暗号に関する情報の中から発見した。添付されたマイクロフィルム文書には、各国大使や連合国首脳にあてたF.D.R.の電報の日本語訳が記されていた。東京の暗号解読者たちは、どうやら大統領の最重要外交暗号を解読していたようだ。

蓑原は確認のため、神戸大学の服部聡教授（近現代史）に東京の外交史料館の特別調査を依頼した。服部は、「特別文書」と題されたフォルダーの中から、12月7日以前の数ヶ月から数週間における米英の極秘外交協議について、主に英語でタイプされた34通のコミュニケを発見した。日本側

は11月中旬までにルーズベルトの攻撃決定を読んでいた。対米平和関係を強く主張し、それまで内閣の「タカ派」に反対していた東郷は、その二枚舌を知り、戦後の回顧録に「めまいがするほどの衝撃を受けた」と書いている。この時点で、われわれは行動を起こす以外に選択肢はなかった。”日本政府の中の「ハト派」ですら、大統領が自分たちを先に攻撃する前に攻撃することを決めたのである。

一方、アメリカがまだ平和を保っている相手を予告なしに攻撃するというルーズベルトの極秘計画は、物流の遅れによって頓挫していた。11月22日、ルーズベルトはラウクリン・キュリーから、爆撃機とその乗組員が中国の基地に到着できるのは12月末であると知らされた。空襲が開始されるのは、遅くとも1942年の新年が明けてしばらく経ってからであろう。真珠湾で亡くなった2,400人のアメリカ人は、自分たちを違法な戦争に巻き込もうとする大統領の公表されていない陰謀のために犠牲になったとは気づかなかった。大統領の外交暗号を破った日本軍は、大統領の真の狙いを知り、約1ヶ月の差で大統領に先手を打ったのだ。

しかし、大量の武器生産によってアメリカ経済を活性化させ、自らの政治的首根っこを守るために長年求めてきた戦争を、一挙に彼に手渡したのだ。今や圧倒的多数のアメリカ人は、自分たちが国を守っているという悲劇的な妄想の中で、喜んで彼の正義に奉仕した。そして彼らは、ルーズベルトを前例のない4期目の大統領に選出した。しかし、その時すでにルーズベルトは末期の淋病で瀕死の状態だった。最後の一撃は脳出血だった。

東京駐在のイギリス代表、ロバート・クレイギー卿は、日本人はルーズベルトの帝国主義と、アメリカを戦争に巻き込もうとするチャーチルの裏工作の罪のない犠牲者であり、人命の犠牲があろうと関係ないと断言した。クレイギーは、この二人の国際的犯罪者が織り成した半年間の陰謀を個人的に目撃していた。彼はハミルトン・フィッシュ下院議員に次いで、アメリカの公式な宣戦布告を求める大統領の要請を熱烈に支持したが、後に、「ルーズベルトは戦争の導火線に火を点けた主犯であり、火付け役だった」と告白している。

チャーチル（そして他のすべての世界の指導者たち）と同様、ルーズベルトもユダヤ人問題をよく理解しており、1943年2月の時点では、偽善的に殲滅戦争を仕掛けていたドイツの国家社会主義者たちに個人的に同情さえしていた：「カサブランカ会議において、彼はモロッコのフランス軍司

令官オーギュスト・ノーグ将軍に、「ナチスがユダヤ人にしたことについて、ナチスを責めることはできない」と打ち明けた。F.D.R.のユダヤ人に対する理解が、彼とチャーチルのユダヤ人に対する自発的な服従をより不道德なものにしている。彼は気の利かないカモではなく、自分が仕える悪を自覚していたのだ。

フランクリン・ルーズベルトは、誰よりも自分が引き起こした戦争が終結する前に亡くなった。その最後の数ヶ月間、彼は悪名高い共謀者たちとヤルタで会談した。梅毒の弊害で肉体的に衰弱し、精神的にも不安定になった彼は、ほろ酔いのチャーチルとスターリンの間に座って写真撮影に応じた。スターリンは、この二人の哀れな人物に象徴される西側列強の衰弱した状態に思いを馳せながら、資本主義のカナリアを飲み込んだ共産主義者の猫のように、密かに微笑んだ。ブリタニカ百科事典は、ヤルタ会談でのソ連の権力者について、「手ごわい交渉人で、外国の政治家たちを出し抜いた」と書いている。

1879年にヨゼフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリとして生まれた彼は、熱心な共産主義者となった後に「スターリン」（ロシア語で「鋼鉄」を意味するスタルから）と改名した。初期のドイツの勝利でソ連が引き裂かれる中、彼は“レーニンが我々のために築いたものはすべて永遠に失われた！”と慟哭した。枢軸国の進撃が1941年の初夏まで続くと、彼は人里離れたダーチャに閉じこもり、ソ連を完全に漂流させたまま、長期にわたって暴飲暴食に走った。ドイツ軍の侵攻は6月22日に始まっていたが、スターリンは7月3日まで酔っぱらっていて公の場で演説することができなかった。しかし、翌年の冬には、自らモスクワ防衛の指揮を執るほどに酔いが覚めていたのだから。彼は、それまでのマルクス主義的なレトリックを捨て、突然、自分をスラブ民族主義者であるかのように見せかけた。この偽善的なポーズは功を奏し、それまでやる気を失っていた何百万人ものロシア人が、祖国防衛の成功のために結集した。

それ以後の戦争で、彼は優れた将軍であることを証明したが、その理由は、彼が軍事的能力をほとんど持っていなかったからというよりも、ソビエト連邦軍の冷酷な再編成と統率にあった。彼は、敗戦による兵士の士気の低下という事態に直面し、赤軍コミッサール制度を導入することによって、自国の抵抗を強化した。コミッサールは、文字通りロシア兵の背後に立ち、ピストルを構えて、動揺する兵士を射殺した。1939年のドイツのゲシュタポの総員数（7,500人）に比べ、同時期のソ連は36万6,000人以上の

秘密警察を雇っていた。

スターリンの功績は、すでにロシアを工業化し（クラークと呼ばれる1000万人の農民を犠牲にしたとはいえ）、今度はその工場を数カ月で総力戦に備えた巨大な軍需工場に変貌させたことである。彼はソ連の戦場戦術を確立した。それは、相手が圧倒的に数で勝る場合にのみ、兵士が常に多大な犠牲を払おうとも、あらゆる戦略を無視して人員と物資を投入するものであった。このような集団突撃がうまくいくこともあったが、失敗することもしばしばで、必ずロシア軍の兵士と機械が全滅した。スターリングラード、クルスク、そして終戦までのソ連の成功は、アドルフ・ヒトラーの目から見ても、スターリンの明らかな軍事的リーダーシップを裏付けるかのようだった。

しかし、総統をはじめとする外界の人々は、スターリンの勝利が、ドイツ参謀本部の裏切り者によって各戦闘の前に手渡されたことを知らなかった。彼らは、「赤いオーケストラ」スパイ網のユダヤ人トップ、レオポルド・トレッパと協力して、ヒトラーの計画をソ連上層部に伝えていたのである。ウィンストン・チャーチルが指摘したように、ロシア革命の大部分はユダヤ人によるものであり、ヨシフ・スターリン---レオン・トロツキーやグリゴリー・ジノヴィエフのようなユダヤ人には、気が利かないが柔軟な操り人形と思われていた---は、ユダヤ人の手先としてソ連の専制政治に投入された。適切なことに、彼はレーニンの死後、ジノヴィエフともう一人の共産主義者ユダヤ人、レフ・カメネフの間に座り、最初の支配者三人組を構成した。

スターリン、チャーチル、ルーズベルトは、個人的な権力と名声に対する旺盛な欲望によってのみ定義された、知性の乏しい凡庸な人物であった。貪欲な政治的無個性は、決して不足することではなく、あまり目にする事のないユダヤの情報網の引き手にとって容易に入手可能である。戦争に参加した世界の指導者たちにとって、戦争はさまざまな意味をもっていた。チャーチルにとっては、単に生計を立て、財政スキャンダルから逃れるための最もやりがいのある機会であった。ルーズベルトにとっては、大恐慌から脱却し、自らの政治的存在を守る唯一の方法だった。スターリンは、ソ連が支配する惑星の支配者、もう一人のチンギス・ハーンになる絶好のチャンスとして歓迎した。これらの男たちにとって、第二次世界大戦は、ファシズム、民主主義、文明、あるいは何百万もの人間を犠牲にして彼らの私的な意図を粉飾したその他の公的な問題とは何の関係もない、個人的な目的のための手段に過ぎなかった。

連合国の指導者たちは皆、個人的な問題を抱え、それが行動を歪めているという点で共通していた。チャーチルは絶望的なアルコール依存症だった。他の大酒飲みと同様、彼は悪酔いし、パラノイアと依存症から好戦的になっていた。F.D.R.はルーズベルトの伝統にのっとり、肉体的には精力的な男だったが、成人初期にポリオで倒れた。自分自身の屈辱的な弱さにもかかわらず、強く見せなければならぬという欲求にかられ、彼はその欲求不満を過剰に補い、外に向かって攻撃的に昇華させた。スターリンは生まれつき腕が変形しており、そのためにシェークスピアのリチャード三世のような劣等感と復讐心を根深く育んでいた。

国家の運命を託されたのは、このような不適合者やまぐれ者、不自由な精神病質者たちであった。チャーチルとルーズベルトはユダヤ人であったが、スターリンはグルジアの異邦人でありながら、ユダヤ人家族（共産主義者カゴノヴィツェ家）と同居し、ユダヤ人女性（ナデジダ・アリルイエワ）と結婚し、イディッシュ語を話していた。このように、連合国と枢軸国の人種格差は、それぞれの指導者において明確に定義されていた。このように、第二次世界大戦、あるいはすべての人類の歴史を理解することは、ユダヤ人が果たした役割を評価することなしには不可能である。アドルフ・ヒトラーが20年前に仕掛けた国家社会主義的政治闘争の論理的、必然的、軍事的延長線上にある第二次世界大戦の歴史ほど、このことが明白なものはない。

彼の闘いを理解するためには、第一次世界大戦後の民主的なドイツが、レーニンの「世界の赤色革命は帝国を通過する」という訓示に従ったユダヤ人共産主義者の遊び場であったことを明らかにしなければならない。ドイツ国民はミュンヘンやベルリンの路上で文字通り飢え死にし、まともな仕事も見つからず、滅多に回ってこない下働き、しばしば卑屈な仕事に感謝していた。乳幼児の死亡率は急上昇した。飢餓、極度の貧困、少年非行、犯罪、不道德、文化の腐敗、政治的街頭暴力、社会的混乱が蔓延した。一方、ユダヤ人土地投機家たちは、「第一次」大戦の壊滅的な影響によって貧困に陥ったドイツ人から、広大な不動産、主に農場を手に入れ、一夜にして大富豪となった。当時も現在と同じように、ユダヤ人がほとんどの職業（特に医学、報道、芸術、政府）を支配していた。ドイツ人はヴェルサイユ条約によって「合法的に」権利を剥奪されていたからだ。同時に、1920年代の腐敗したワイマール共和国には、マルクス主義者と資本主義者のユダヤ人が混在しており、彼らは貧窮したドイツ国民をイデオロ

ギー的・経済的な豆袋としかみなしていなかった。バイエルン、ベルリン、コブレンツのような州、市、町全体が共産主義者の犯罪者によって接収され、その指導者たち-カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、クルト・アイズナーなど-は事実上すべてユダヤ人だった。

しかし、アドルフ・ヒトラーが首相に選出されたとき、彼らはかつて遭遇したことのないような民衆運動によって敗北した。多くのユダヤ人がドイツを離れ、ソ連、フランス、イギリス、アメリカに移住し、そこですぐに復讐戦争を煽り始めた。敗戦国ドイツへの政治的・経済的投資は、国家社会主義の人気によってすべて水の泡となった。ヒトラーの勝利からわずか数ヵ月後の1933年夏には、ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで、世界ユダヤの有力者たちによる大集会が開かれた。彼らのスポークスマンはサミュエル・J・ウンターマイヤーであり、彼らが提案した仕事にはうってつけの人物だった。その26年前、ウンターマイヤーはほとんどのアメリカ人の反対を押し切って、アメリカに対独宣戦布告のレールを敷いた。彼は、ウッドロー・ウィルソンをスキャンダルで脅すブラックメーラーに金を払い、軽率な大統領が政府の非交戦政策を撤回することを条件に、この驚くべき偉業を成し遂げた。(アメリカの第一次世界大戦参戦のユダヤ人の起源は、著名な研究者であるアンドリュー・コリンズとクリス・オギルビー・ヘラルドによって、反論の余地のない形で綴られている)。

そして1933年、この戦争屋のプロフェッショナルが再び動き出した。ウンターマイヤーは、新ドイツに対する「聖戦」を宣言し、その後、アメリカの著名なユダヤ人全員がこれを支持した。「われわれが提案し、すでに実行に移しているのは、ヒトラー政権を弱体化させる純粋に防衛的な経済ボイコットを行うことである。

これまで誰にも危害を加えていない民族に対するウンターマイヤーの“聖戦宣言”に対して、ユダヤ人新聞ナツチャ・レツチュは、旧約聖書の伝統にのっとって、こう憤った！それによって、対独戦争はイデオロギー的に盛り上がり、ドイツを完全に破壊しなければならない我々の利益を促進する。われわれユダヤ人にとっての危険は、ドイツ人全体、ドイツ全体、そして個人にもある。ドイツを永久に無害にしなければならない。”

アドルフ・ヒトラーが1945年4月30日に死去した日に署名した遺言は、このような猛烈な煽動を裏付けているようだ：「私やドイツの誰かが1939年に戦争を望んだというのは真実ではない。1939年の戦争は、ユダヤ系か

ユダヤ人の利益のために働く国際政治家たちによってのみ望まれ、扇動されたのである。

それから60年以上経った今でも、ユダヤ人は、ドイツ人の一部がどれほど親ユダヤ的であろうと、反ナチス的であろうと、すべてのドイツ人を「加害者民族」の一員と呼んでいた。こうして、カナダ・ユダヤ人議会は、カナダ司法省の「戦争犯罪と人道に対する罪部門」の主任歴史家ルース・ベッティナー・ビルンを、彼女が国家社会主義者を起訴していたにもかかわらず、異邦人ドイツ人であったという理由だけで、非難したのである！

ウンターマイヤーの「聖戦」の第一段階は、「数百万人の非ユダヤ人の友人たち」（1933年8月7日付『ニューヨーク・タイムズ』紙）の助けを借りてドイツを破壊することを目的とした経済ボイコットだった。彼は、

『シオンの長老たちの議定書』（20世紀初頭の世界指導者たちの秘密会議の議事録）に概説されている戦略を言い換えたもので、ユダヤ人の意図に反抗する異邦人国家は、経済制裁によってその首を絞めなければならないというものだった。これは、ユダヤ人が依然として政治的（つまり財政的）影響力を及ぼしている他の異邦人諸国が行う軍事的措置の前段階として機能する。第7議定書のポイント3では、議事録に「われわれは、われわれに反対する勇気のある国の隣国との戦争によって、あらゆる抑圧行為に対応する立場にななければならない」と書かれている。

世論形成者たちはヒステリックに一貫して「偽書」の烙印を押したが、それでもユダヤ人自身によってこの文書の信憑性は立証されている。彼の著書『神に気をつけろ：南アフリカのユダヤ人歴史家デイヴィッド・アッシュは、著書『神に気をつけろ：究極のパラドックス』の中で、「シオンの長老たちの議定書は、ユダヤ人が権力を掌握し、自分たちの目的を推進するために聖書の教義を利用するという人類への真の警告である」と述べている（Parfrey, 405）。1980年代初頭、20世紀半ばで最も影響力のあったユダヤ人の一人であるアーマンド・ハマーは、アメリカのオクシデンタル石油公社のボスであり、ニクソン大統領とレーガン大統領の政治的操り人形師であったが、他のユダヤ人（メディア王のロバート・マクスウェル、イスラエルの大富豪シャウル・アイゼンバーグ、世界最大の不動産会社のトップであるアルバート・ライヒマンなど）と国際的な企業体を設立した。ハマーは、世界有数の権力者たちからなるこの億万長者クラブを、図々しくも「シオンの長老たち」と呼んだ（Epstein, 322）。結局のどこ

ろ、シオニズムの世界的指導者は、1941年にチャイム・ワイズマンがウィンストン・チャーチルに、ユダヤ人は第一次世界大戦でアメリカをドイツと戦わせたが、第二次世界大戦でもそうするだろう、と語ったとき、ウンターマイヤーと『議定書』の第3章第7節が主張したことを繰り返したにすぎない（アーヴィング『チャーチルの戦争』第2巻、76,77）。

M.ラファエル・ジョンソン博士は、ウンターマイヤーのボイコットは「単なる比喩ではなく、政治的、社会的、経済的実体としてのドイツを破壊するための、よく練られた手段であった」と書いている。ユダヤ人によるドイツに対するボイコットの長期的な目的は、第一次世界大戦後にドイツに課された賠償金に関してドイツを破産させ、ドイツを非武装で脆弱な状態に保つことであった。実際、ボイコットはドイツにとってかなりの痛手となった。エドウィン・ブラックのようなユダヤ人学者は、ボイコットに対抗してドイツの輸出は10%削減され、多くの人々が外国にあるドイツの資産の差し押さえを要求していたと報告している」（43）。ユダヤ人を批判することだけが唯一の「罪」であった人々に対して、このような措置が取られたのである。

しかし、国家社会主義はドイツを国際通貨網から経済的に独立させていたため、世界的なボイコットは失敗に終わった。そして、他の異邦人がドイツ人のようにユダヤ人の力の現実に目覚めたらどうなるか、ユダヤ人に説明する必要はなかった。また、ヒトラーは自国の失業を解決し、繁栄を取り戻したが、他の西欧文明諸国は世界恐慌に陥っていた。ヒトラーの例が他の国でも採用されれば、ロスチャイルド家によって築かれたユダヤ人の国際銀行ネットワークは崩壊するだろう。

ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンの演壇でのウンターマイヤーの「宣戦布告」だけでなく、1930年代を通じて、対外的にヒトラーを煽動していたことは明らかである。フランスにはレオン・ブルムというユダヤ人首相がいたが、アイザック・レスリー・ホレ＝ベリシャ（ホレ＝ベリシャ男爵1世）はイギリスのユダヤ人陸軍国務長官で、最も声高に戦争を主張する人物だった。驚くなかれ、チャーチルは陰謀を企む「フォーカス」の代表として彼に勲章を与えた。ソ連のユダヤ人たちは、ドイツ国境をはるかに越えた国家社会主義のイデオロギー的魅力によって、世界統一政府樹立の計画を脅かされていた。マルクス主義から脱却し、ドイツで国家社会主義を政権に就かせた労働者大衆が、他の国でも同じことを繰り返し、ユダヤ人が支配する国際的な「プロレタリアート独裁」というカー

ル・マルクスの夢を永遠に終わらせると信じるだけの理由があった。

報道機関や映画界でアドルフ・ヒトラーを人類最悪の敵として一方的に描くことを通して、ユダヤ人は武力敵対行為の前提条件として憎悪の風潮を心理的に作り始めた。しかし、平和時の侵略宣言から60年後、ユダヤ人作家のレニー・ブレナーでさえ、「戦前、シオニストの指導者たちはドイツ政府に対する大規模な国際ボイコットを宣言した」と認めている。この攻撃的な政策が、すでに炎症を起こしていた状況に油を注ぐことになり、その結果、ホロコーストの発端となった」... (Parfrey, 404,405) と認めている。

F.D.R.の“アドバイザー”の一人で、アメリカ・シオニスト団体の代表であったルートヴィヒ・ルイゾーンは、1942年10月3日、ニューヨークの『*The Jewish Mirror*』紙に次のように語っている。他の誰でもない。他の何者でもない。これがアルファでありオメガであり、すべての問題の始まりであり終わりなのだ！”彼が同胞の名の下に手柄を立てた紛争がもたらした6100万人の死者（2億4000万人の負傷者、共産主義のもとで何世代にもわたって奴隷にされた無数の人々、そしてかけがえのない文化財の消滅は言うまでもない）は、彼らを全人類史上最も血に染まった戦争犯罪人に行っている。


NS KAMPFRUF
KAMPFSCHRIFT DER NATIONALSOZIALISTISCHEN DEUTSCHEN ARBEITERPARTEI AUSLANDS- UND AUFBAUORGANISATION
Nummer 104 Eingeleitet 1975 26. April 2017 07:04

Der Kampf geht weiter !

Seitdem Hitler nach der Kapitulation der Wehrmacht am 8. Mai 1945 ist die nationalsozialistische Bewegung wieder da, so jetzt in der Nachkriegszeit. Und zwar nicht nur in Deutschland, sondern auf globaler Ebene!
Menschen von Völkern, Nationen, Vorfahren, Vorfahren haben nicht umsonst, das Leben der ganzen Welt um unsern hoch geliebten Führer Adolf Hitler zu entwickeln.

Alle Nationalsozialisten und sonstige weltweite Völker und Rassenbewegungen sollen Schüler an Schüler an Kampf um die Erhaltung unserer weißen Völker.
Die Bewegung ist zwar wieder geworden, aber die Gefahr des biologischen Völkertods ist heute noch viel größer als in der Vergangenheit.

Ein verwerfliches Gerede ist eben dabei, das Volkstum – gegen alle weißen Völker (!) – zu hegen, sein Volk und seine Erbschaft, Überlieferung und Lebensweise.

Ob "legal" oder "illegal", ob in Wahlkampf oder im Straßenkampf, ob mit Propagandamittel, bewaffnet oder auf einem Schiffsfeld anderer Art. Jeder Nationalsozialist hat seine Pflicht!

Hitl Hitler!
Gottfried Lueck


TROTZ VERBOT NICHT TOT!


N.S.ニュース速報A
www.nsdapao.org
#1005 19.06.2022 (133)
NSDAP/AO: PO Box 6414 - Lincoln NE 68506 - USA

フロントレポート
モリーへのインタビュー
第3部

NSK: 現在のプロジェクトは、明らかに哲学的で、アートに関連したもので、
です。

このような活動が政治に与える影響について、あなたの考えをお聞かせください。

モリーです。フォトギャラリーの更新は続けていますが、主にAdolf Hitler and the Army of Mankind (www.mourningtheascend.com/truth.html)に集中して取り組んでいます。現在21ページですが、まだまだやるべきことがたくさんあります。第二次世界大戦の勃発は、まさに情報の増量です。1つのことについて情報を集めても、さらに2つほど調べたいことが出てくる。まるで、埋も




the NEW ORDER
Number 176 (2022) Founded 1975 April 26, 2022 07:04

The Fight Goes On !

Seventy years after the capitulation of the Wehrmacht on May 8, 1945, the postwar National Socialist movement is stronger than ever not only in Germany, but throughout Europe.

Decades of mass murder, expulsion, persecution, and defamation have not sufficed to destroy the word of the brilliant idea of our much loved Führer Adolf Hitler.

All National Socialists and other racially-aware counterforces and racial kinmen fight side by side for the preservation of our White folk.

The movement has indeed become stronger, but the danger of biological folk death is also much greater today than in the past.

The desperate enemy is in the process of committing genocide against all White folk. His means are non-White immigration, culture distortion, and re-education.

Whether "legal" or "illegal", whether in election battle or street battle, whether armed with propaganda material or on a battlefield of a different kind every National Socialist must do his duty!

Hitl Hitler!
Gottfried Lueck


TROTZ VERBOT NICHT TOT!

NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物
多くの言語の何百冊もの本
多くの言語の何百ものウェブサイト

SS Defender against Bolshevism
by Reichsführer SS Heinrich Himmler

Translated from the SS Original

The Poisonous Mushroom
Johann Stauden der Ritters Pflanz Buch

Translated from the Third Reich Original
Der Giftpilz

Hitler in Italy
Rudolf Heßmann

English / German Deutsch / English

SS Viewpoint – Vol. 9
Wife and Family


The Sins of High Finance
Theodor Fritsch


Luftwaffe War Art
Die Luftwaffe im Bild

English - German / Deutsch - English

BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com



NSDAP/AO
Fight Back!



nsdapao.org

Contact us to find out how YOU can help!